

グレナダ革命の未来とフェミニズムの長い革命

——マール・コリンズ『エンジェル』における恥と時間の弁証法

(The Future of the Grenada Revolution and the Feminist Long Revolution:
The Dialectics of Shame and Temporality in Merle Collins's *Angel*)

吉田 裕 (Yutaka Yoshida)
教養教育研究院葛飾キャンパス教養部

一、はじめに

グレナダは人口が十二万人ほどの小さな島である。しかし、環カリブ海地域の歴史が凝縮された場所としても知られる。ハイチ革命後、ハイチの皇帝となったアンリ・クリストフはグレナダ出身だと言われている。ブラック・パワー運動の源流となったマルコム X とマルコム・リトルの母親、ルイズ・リトルの故郷でもある。一九七九年にグレナダ革命を成就した人民革命政府は、ハイチ革命とブラック・パワー運動を自らの思想的源流として位置付けた。やはり、母親がグレナダ出身であり、アメリカ合衆国にてクィア・フェミニズムの詩人および批評家として活動したオードリー・ロードは、一九八三年にグレナダへの米軍侵攻を批判する文章を発表している。⁽¹⁾

作家であり詩人でもあるマール・コリンズは、グレナダ革命とその崩壊、その後の米軍侵攻を生涯の主題として取り組んできた。グレナダを起点としながら、カリブ海地域の政治、歴史、文化を批判的に思考してきた。⁽²⁾二〇〇五年に行われたインタビューで、ハイチ革命で行われてきたことはカリブ海地域全域で行われてきたことだと述べる。そして、自身が大学院で指導する学生の言葉だと断りを入れながら、歴史が反復するさまを「終わりのなき予行演習」であると表現している。「指導者間の裏切り、殺害、人びとに対する抑圧

…それに、侵攻などの全てです。終わりのなき予行演習のようです」。⁽³⁾グレナダ革命の結末がハイチ革命にてすでに先取りされていたことを示唆しつつ、円環的な歴史意識を提示している。

さらにコリンズは、二〇〇七年に発表したエッセイのなかで、このような円環的な時間概念に込められた悲観的ヴィジョンについて、別の観点から考察している。彼女はここで、二十世紀に島を襲った、ハリケーンを中心とする自然災害の歴史のなかにグレナダ近代の政治変動を位置付ける。島では自然災害によって周期的にインフラや制度が破壊されるが、並行して周期的な政治変動に襲われる。その際、男同士の絆が敵対意識へと変容し暴力へと転換する様を、グレナダ革命の崩壊プロセスをはじめとする政治闘争に見出し、自然災害のもたらす破壊と暴力になぞらえている。「兄弟同士が争いを始める。それに、いったいどうしてハリケーンには女性の名がつけられるのか疑問に思わざるを得ない。銃に爆弾、爆撃機など、同様のものを用いた世界中での政治闘争は、つねに男が男に対抗した結果引き起こされるが、国を潰してしまうハリケーンを彼らが名づける段になると、最初につけられるのは女性の名である」。⁽⁴⁾一九五五年のハリケーン・ジェインをはじめ、自然災害を名付け記憶する側は、政治闘争の主人公も含めてながら男性が主体であった。だが、

二〇〇四年のハリケーン・アイヴァンには初めて男性の名が付された。コリンズはここに変革のきざしを見出し、過去の政治闘争を振り返るにあたって、男性中心主義からの脱却が必要であることを示唆している。

コリンズによる小説の第一作目『エンジェル』は、革命と革命崩壊までのプロセスをたどりつつ主人公エンジェルの成長を描く教養小説であると評価が定まって以降、グレナダにおける真実和解委員会（二〇〇一年から〇三年）以後の国民的な沈黙や和解をめぐる文脈、さらにはフェミニズムの文脈で解釈されてきた。⁽⁵⁾ これらの研究を踏まえつつ本稿で注目したいのは、時間意識と情動の関連性である。すでに指摘されてきたように、『エンジェル』では円環的な歴史意識が顕著である。⁽⁶⁾ さらに、カリブ海地域の思想史においても、発展や進歩などの近代を特徴づける直線的な時間意識よりも、円環的な時間意識が地域特有の文学や思想に通底していると論じられてきた。⁽⁷⁾ もちろん、『エンジェル』もこうした時間意識のなかで書かれている。

批評家のレイモンド・ウィリアムズは社会変容に複数の次元を導入して思考してきた。ウィリアムズは、政治制度の変革による民主的プロセスの変容や技術革新によってもたらされる学びやコミュニケーションの変化とは別に、「人間や社会についての新たな概念」を自ら獲得するプロセスを「長い革命」と呼んでいる。⁽⁸⁾ 『エンジェル』では、日常の変革としてのフェミニズムが、まさに主人公や登場人物たちの必要性から生み出される。重要なのは、その変容は、物語のなかで恥を契機として弁証法的過程を経ることにより、独自の時間軸の中で用意されているという点である。確かに、カリブ海地域で行われてきた実際の革命とウィリアムズの定義する革命は距離がある。⁽⁹⁾ だが本論では、ウィリアムズの名指す革命を修正しつつ援用し、恥をきっかけとして用意される自発的な変容を「長い革命」と呼ぶ。そして、直線的でも円

環的でもなく、漸進的かつ予示的な時間軸のなかで実践される変化として位置付ける。

『エンジェル』において時間軸が重要なのは、この小説が世代ごとの違いを比較参照することで成り立っているからである。問題は、直線的な時間と円環的な時間が互いに弁別不可能なかたちで共存していることだ。なぜこのようなことが起こるかと言えば、革命において成し遂げられる変容が、世代ごとに異なって見えるからである。たとえば、後続世代から見たら遅々として進まない変容も、先行世代からすればドラスティックな変容に見える（直線的時間軸における短期的停滞と円環的な時間軸における漸進的進歩）。また、過去を振り返った時、先行世代は後続世代に自らの願望が体现されていると確認することもある（直線的時間軸における予示的変容）。さらに、後続世代が、先行世代の保守性と自らの革新性のあいだに反復を見出して、相似的な硬直性を確認してしまう場合もある（円環的な時間軸における停滞意識）。ただし、以下で議論するように、直線的な時間軸と円環的な認識が人物ごとにふり分けられていたり、同一人物内に共存したりする。その限りでは、両者は完全には弁別不可能なのである。

次に注目すべきは、その共存を可能にしている恥の形象である。⁽¹⁰⁾ 恥という情動は、とりわけ植民地の記憶をめぐる「和解」の文脈で、共犯関係を意識させる情動として注目されてきた。⁽¹¹⁾ さらに、植民地支配下で、女性らしさや女性の身体をスティグマ化する情動としても論じられてきた。⁽¹²⁾ 結論を先取りするならば、『エンジェル』では恥という形象を埋め込み時間意識を複雑化することにより、女性たちが背負ってきた苦悩や革命の内紛という国民的・汎カリブ海地域的なトラウマを、別個の孤立した体験ではなく、集団的な共通の記憶として浮かび上がらせようとしているのだ。もちろん、先ほど言及した「終わりのなき予行演習」という言葉には悲劇的なヴィジョンが込められている。⁽¹³⁾

以下では、まずはグレナダ革命とグレナダ侵攻の概要について時系列に沿って事実を確認し、『エンジェル』の概要を示す。二点目に、作品における恥という情動に注目し、いかにしてこの情動が時間意識の契機となっているかを確認する。すなわち、直線的時間や円環的時間のなかに登場人物自らが存在することを反省的に意識するきっかけとして恥がある。そして、小説で描かれる三世代の女性たちのあいだで、短期間での革命と長期にわたる革命という二つの位相から、フェミニズム的な成長が橋渡しされていることを論じる。家族での変革や軋轢が、グレナダ革命のはじまりや崩壊とパラレルになりつつも、別のかたちの時間を扱っていることを示す。三点目に、『エンジェル』以後に出版された詩集 *Lady in A Boat* からいくつかの詩をとりあげて、小説における展開とは関連しつつも、また異なる位相で恥が集団的な責任を問う足がかりとなっていることを指摘する。

二、グレナダ革命とグレナダ侵攻

カカオとナツメグを主な生産品とするグレナダは、他のカリブ海地域の島々と同様、プランテーション社会であった。一九五一年、グレナダで憲法が改正され普通選挙制が敷かれる。労働者のエリック・マシュー・ゲイリーは、プランテーション支配に対する組合活動に参加するなかで、指導者として頭角をあらわす。⁽¹⁴⁾ 大農園主や産業界、中産階級を混乱に陥れたのだった。⁽¹⁵⁾ 五七年には、対立候補の集会に介入した罪で政治活動を禁じられる。⁽¹⁶⁾ ゲイリーは六一年の選挙で勝利を収め、政権の座につく。しかし、六〇年代後半になると、ゲイリーはイギリス植民省と妥協し、保守化・強権化するようになる。そうした状況に対抗するため、七一年には人民会議運動 (MAP, Movement for Assemblies of the People) とジュエル (JEWEL, Joint Endeavour for Welfare, Education and Liberation) が結成され、ゲイリー政権に対するデモや抗議活動が

始まった。七三年初頭には二つの流れが合流し、ユニゾン・ホワイトマンとモーリス・ビショップを共同連携書記官としたニュー・ジュエル運動が誕生した。⁽¹⁷⁾ 運動はブラック・パワーの影響を受けつつ、ゲイリーのもとでのイギリスからの独立に異をとねえたのだった。

一九七三年十一月十八日、ゲイリーは自身の政策に批判的な政党の弾圧を目論み、ビショップを含むニュー・ジュエル運動の指導陣を拘束し、拷問した。さらに、七四年の一月二日、街頭で抗議中であったモーリス・ビショップの父親のルパート・ビショップを殺害する。⁽¹⁸⁾ ゲイリーはマングース・ギャングと呼ばれる武装集団を従えることで、反政府運動を容赦なく弾圧し、抵抗者を投獄した。⁽¹⁹⁾ このような中、ニュー・ジュエル運動は武装闘争の準備をひそかに進めていた。七四年には、グレナダは正式にイギリスからの独立を遂げる。七六年にニュー・ジュエル運動は他の政党と糾合し、人民連合 (the People's Alliance) として同年の選挙を戦い、その後、人民革命政府 (People's Revolutionary Government) へと名を変える。同年の選挙で、ゲイリーと彼のグレナダ連合労働党 (Grenada United Labour Party) は政権の座を維持したが、議会においては議席を減らした。⁽²⁰⁾

一九七九年三月十三日、ゲイリーがニューヨークで国連総会に参加しており不在のあいだ、人民革命政府は政権を奪取する。社会主義的政策を進めることで、識字率や生産力の飛躍的向上を短期間のうちに成し遂げる。識字教育のみならず文化や教育全般に力を注ぐことで、イギリス支配下での植民地教育から脱却し、地域主義的な教育や文化活動が盛んになった。⁽²¹⁾ 地区ごとに合議システムを取り入れ、直接民主制に基づく意思決定システムを採用した。⁽²²⁾ 革命開始から一年のうちに、失業率は四九パーセントから三五パーセントまで大幅に減少したのだった。⁽²³⁾

革命政府は、カリブ海地域の多くの国々か

ら支持を得ていた。ガイアナの人民民族会議 (the People's National Congress) や労働人民連合 (the Working People's Alliance)、ジャマイカ労働者党 (Workers Party of Jamaica) と人民国家党 (the People's National Party)、さらにはキューバ政府から一貫した支援を受けていた。一九八〇年六月、首都セント・ジョージズのクイーンズ・パークで爆撃があり、革命政権への外からの攻撃を疑わせた。内外からの圧力に疑心暗鬼になった党は、方針に沿わないとみなされた雑誌を廃刊に追い込んだ。その一つが『かがり火』(Torchlight) である。⁽²⁴⁾

一九八三年十月十二日、モーリス・ビショップが自宅軟禁の状態におかれる。ビショップは、いったんは党の理論的支柱であるバーナード・コアードとの二大指導者制度に関する党の方針に同意した。しかし、東ヨーロッパを外遊中に考えを変えた。党によれば、その後コアードらが自分を殺そうとしているという噂を広めたのだった。以上をもって党の決定に背いたというのが、ビショップの軟禁措置の理由であった。十八日には、ビショップの軟禁に抗議して大臣らが役職を辞任した。⁽²⁵⁾ 同月十九日、そのことを知った人びとが、ビショップ解放を求めて自宅に押し寄せる。ビショップはユニゾン・ホワイトマンやケンドリック・ラディックスらの力で解放されるが、別部隊によってフォート・ルパートへと連行される。その直後、首相のビショップ、彼のパートナーで教育、若者、社会、女性問題担当大臣のジャクリーン・クレフト、外務大臣のユニゾン・ホワイトマンを含む少なくとも十七人が、党の方針に背いたとして銃殺刑に処される。

生き残った党の中央委員会のメンバーは、経済計画大臣のバーナード・コアード、バーナードのパートナーであり女性問題副大臣及び国民女性組織 (NWO, National Women's Organization) の議長であったフィリス・コアードを含む十七名がいた (「グレナダ・セブン

ティーン」と呼ばれる)。これらのメンバーで構成された人民革命政府は、アメリカの侵略を察知していたためキューバに助けを求め、フィデル・カストロはコアードを中心とする政府を反革命とみなし、援軍を送らなかった。⁽²⁶⁾ 米軍はプエルト・リコのビエケス湾に駐留していた軍隊を派遣した。グレナダ在住のアメリカ人の学生らを救出するという名目で、ひいては、内紛後に暫定的に国を支配していた革命軍評議会からグレナダの人びとを救済するという名目であった。⁽²⁷⁾ ジャマイカ首相エドワード・シアガやドミニカ首相ユージニア・チャールズをはじめとする旧英領カリブ海諸国の首脳らは、米軍の行動に賛同を示した。⁽²⁸⁾ 二五日、米軍が上陸する。なかには、抵抗の意を示すために断崖より飛び降りる人びともいた。革命軍は洞穴に隠れて持久戦を試みるも、開始から四日で侵攻は終了した。コアードをはじめとする人民革命軍は、米軍に捕えられて収監された。⁽²⁹⁾ 国連安全保障委員会は米軍の侵略を非難したが、アメリカが拒否権を発動した。

占領後は、米軍の心理作戦部隊 (PSYOP, the Psychological Operation Unit) の手で、ビルボードなどに掲げられた革命の功績を讃える文言が国中から消去され、代わりに米軍を歓迎するメッセージが掲げられた。現在でも、空港のそばには米軍の功績を讃えるモニュメントが聳えている。米国内では、グレナダ侵攻はベトナム戦争以後続いていた厭戦気分を払拭するきっかけとなった。クリント・イーストウッド監督による米軍視点の映画『ハートブレイク・リッジ』(一九八六年公開) も作成され、好戦的な空気をもたらした。⁽³⁰⁾ さらに、ニカラグアやキューバといった社会主義政権を打倒するための足がかりとして、グレナダ侵攻が位置付けられたのであった。

グレナダおよびカリブ海地域の左派政治にとっての深い傷は、グレナダ革命自体がある種の内紛によって瓦解してしまったという事

実に加え、あるいはそれ以上に、その内紛後の状況に耐えかねた、それまでの革命の支持者たちを含むグレナダの人びとが、米軍を「解放軍」として受け入れてしまったことだ。⁽³¹⁾その後、とりわけ一九九〇年代後半から二〇〇〇年代にかけて長期の在任を誇ったキース・ミッチェル政権時には、米軍侵攻の十月二五日はグレナダの国民の祝日として位置付けられてきた。⁽³²⁾モーリス・ビショップの遺骸もいまだに発見されていない。グレナダ革命やその後の侵攻で命を落とした人びとを記憶するモニュメントもいまなお不在である。⁽³³⁾

三、マール・コリンズ『エンジェル』の描く グレナダ革命

『エンジェル』は、以上のような革命の歴史的・政治的背景を織り交ぜながら、より長い射程を視野に入れつつ、グレナダ革命に至るまでの歴史を意識して描かれている。本節では、作品の要約を行い、執筆の背景や作品の構造について述べるが、その際に以下の論点に留意したい。まずこの小説では、革命が人びとの生活や家族関係の再考を促しただけでなく、フェミニズム思想の日常化とどのような意義があったのかということが具体的に展開されていること。このフェミニズム思想の日常化という論点に関しては、のちに詳述するが、主人公エンジェルとその父親アランの関係性の変容に見て取れる。さらに、このような日常レベルでの変化をマクアリスター一家の視点から描くことで、マルクス主義的な経済論理による説明や反革命的な物語による説明とも異なる、民衆史的かつフェミニズム的な視点による歴史叙述を行っている、ということだ。⁽³⁴⁾

まず、『エンジェル』の物語は以下である。作品は三代目の女性の視点からグレナダの歴史を描く。物語の半分以上を占めるのが、グレナダがイギリスによる植民地統治から離脱し、独立を獲得した末に革命政権樹立に至る

までである。後半の三分の一ほどで、革命崩壊、そしてアメリカによるグレナダ侵攻までが語られる。主人公は三代目のエンジェル・マクアリスターだが、作中で視点人物として最も焦点が当てられるのは二世目の女性ドゥージーだ。物語がはじまるのは一九五〇年頃のこと、赤ん坊のエンジェルを連れたドゥージーが、地主のウォルター・デ・ライルとジャイルズ・デ・ライルのプランテーションが放火される様を眺める場面である。夫のアランとともに、出稼ぎ先のオランダ領アルバ島から故郷のグレナダに帰ってきてまもなくのことだ。彼女にはエンジェルの名付け親で親友のエズラがいる。また、兄のレガルは、プランテーションによる搾取に声をあげた「指導者」（おそらくエリック・ゲーリーがモデルとなっている）を支持してストライキに加わる。これ自体、それまでの世代には理解できない行動である。母のマ・エティーは、「指の長さはそれぞれ違うのだから」という諺を用いて、レガルの行動に疑問を提示する。アランは家庭の外で子供をもうけて、ドゥージーを苦しめる。ドゥージーの母マ・エティーも夫と離婚し、子育てをした過去がある。

ドゥージーはナツメグやカカオのプランテーションでの労働、商店の経営、さらには白人家庭での家事労働を交互に行いながら、貧しさに耐えつつ働いて四人の子供を育てる。長女のエンジェルはグレナダの首都セント・ジョージズにある修道院学校や、ジャマイカの西インド諸島大学モナ校に通い、母の世代とは異なる高等教育を受けることになる。修道院学校では、肌の色が白く、髪がストレートであることが美しいという価値観を内面化するが、大学では反対に、ブラック・パワー全盛期の七十年前後、髪にコテをあてて縮毛矯正をすることは古い価値観だとみなされる。教育を終えて帰還したエンジェルは実家に住みつつ高校の教員として働くが、いまだに「指導者」を崇拝する父親と価値観がぶつかる。人びとの不満が高まりつつあり、

デモなどの社会運動に精を出すも、「指導者」は自身の取り巻き集団を用いて運動を弾圧する。不当にも、エンジェルの友人の一人が収監されてしまう。また、運動の中心団体であるホライズンは、このような中で地下に潜らざるを得ない。「指導者」不在のとき、ホライズンを中心とした革命政府が政権を奪取する。エンジェルの弟ルパートやカールも、革命に参加する。それまでとは異なり、教育に資金は必要なく、水道や医療などのインフラも充実するようになった。政治プロセスでの決定も地区ごとの直接民主制により合議で行われた。

しかし、次第に革命党による政治運営に翳りが見えるようになる。革命の「最高責任者」(モーリス・ビショップのことと思われる)が、党に関して不要な噂を流しているのも、噂に騙されてはいけないというラジオ放送が流れる。八三年十月、最高責任者が監禁されたとの噂が広まる。人びとは通りに出て、彼を軟禁状態から解放する。革命の崩壊、そしてアメリカの軍事侵攻がはじまる。エンジェルは、革命政権のメンバーに連れられてアメリカの侵略に対する戦いに参加する。そして片目を失う。緊急にニューヨークへ渡り手術する。飛行機で帰還し、一家はエンジェルを迎え入れる。

ちなみに、作者のコリンズも、『エンジェル』の主人公とほぼ同じような道筋を歩んでいる。主人公の通った高校や大学も、コリンズの通った場所をモデルとしている。その意味で、ある部分では自伝的な要素もある作品だ。ただ、小説では描かれていないが、コリンズの場合、より明確に革命のプロセスに関わっていた。ジャマイカの西インド諸島大学で英文学を学び、合衆国のジョージタウン大学でラテンアメリカ研究の修士号を取得した作者は、グレナダ革命後に帰還し、スペイン語通訳の仕事のみならず、ビショップの外遊先での原稿執筆などの役割も担っていた。⁽³⁵⁾ 革命崩壊後、米軍占領下で仕事も居場所も失い

イギリスに移住したコリンズは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス博士課程に入り、政治学の学位取得を目指す。その際に研究対象としたのが、五十年代から七九年までのグレナダの政治プロセスについてである。⁽³⁶⁾そして、博士論文に取り組むかたわら、『エンジェル』を執筆し出版したのであった。

『エンジェル』においてグレナダ革命とグレナダ侵攻について描かれるのは、作品の最後の三分の一ほどの分量に過ぎない。この三分の一の場面では、あまりに多くのことが凝縮されているため、速度が早く感じられる。一方で、作品では、革命の前史にあたるエリック・ゲイリーが登場した時代にさかのぼることで、なぜストライキをきっかけとする組合活動がプランテーション社会に対する疑義を呈したにも関わらず、人びとの尊厳を奪う政権へと変容してしまったのか、またこのような社会に変化をもたらすために、なぜ社会主義革命が必要であったのかを、人びとの立場で考えることができる構造になっている。

四、恥の弁証法——直線的時間と円環的時間

ここで注目したいのが、恥という情動の役割である。革命の動きと合わせて考えたとき、恥には二重の役割がある。ひとつは、直線的な時間軸における恥である。その際、直線的な時間軸において、短期的な観点で自身を停滞状態にあるとみなす。そうした反省的な意識が自らに向くとき、怒りとなる。カール・マルクスはアルノルト・ルーゲへの手紙のなかで、ドイツ愛国主義を批判する文脈で、恥を革命と結びつけている。「羞恥はすでにしてひとつの革命だ、と私は答えましょう。じっさい羞恥は、かつて一八一三年に打ち負かされたドイツ愛国主義にたいするフランス革命の勝利なのです。羞恥とは、一種の憤怒、おのれ自身に向けられた憤怒です。全国民がほんとうにみずからを恥じるなら、彼らは跳躍しようと身構えているライオンになるでしょう」。⁽³⁷⁾ 恥は怒りを自身へと振り向けること

によって生み出される。自らの置かれた状態への不満や憤りが恥へとつながる。もうひとつは、マルクスが言うように、恥のあらわれ自体が革命であり、革命という政治制度の変革に先行し、それを準備している。そのような意味で、ここでの恥は、革命のナラティブに通底する直線的な時間軸のなかで予示的な時間を内包している。

まずは、『エンジェル』のなかで直線的な時間概念に沿うかたちであらわれる恥を見てみたい。あるときドゥージーが、子供が病気がちなために医者に診てもらったところ、ミルクのような栄養価の高い物を買いなさいと言われた。貧しすぎて食べ物も十分に手に入らないことを知っていたため、「ドゥージーは口を開きかけた。鼻の奥あたりに恥で涙が溢れ出るのを感じた。しかし、上唇の内側を噛み締めて押し殺した。あいつに言ってやろう。一体どこでそんな金を手に入れたらいいか、問い詰めてやる。だが、何かに喉の奥を掴まれ、言いたかった言葉を奪われたようだった」。⁽³⁸⁾ このように、恥は怒りの証言となっている。この時点では変革は実現しないものの、変革を必要とするという点では直線的な時間軸に位置付けられる。ただし、後に触れるように、娘のエンジェルに変化を託す際もやはり恥が問題となることを考えると、将来にその変革の種をまいているという点では直線的で予示的な変革を内包する。

次に、円環的な時間軸における恥である。この場合、恥は家父長制を固定するものとしても機能する。先ほどの場面でドゥージーが感じる恥は、世代を超えて受け継がれたものでもあると言えるからだ。例えば、ドゥージーの母マ・エティーは、必ずしも一夫一婦制にとられない存在である。マ・エティーは、母親であり、エンジェルからすれば曾祖母であるマ・グレースに、子供が生まれた後で酔っ払ってばかりいる夫と離婚し、家庭の外で別の男性と生活していることを批判される。「みんなが言っていることは本当なんだね！ よ

りによって他人様の夫と！ ああ神様、エティーや、恥ってものがないのかい？」(61)。このように、マ・グレースからマ・エティーに向けて、またその記憶をマ・エティーがドゥージーに語ることで、恥を通じた女性らしさについての教育が行われる。それは、「女性是这样あらねばならない」という意識をあくまでも世代によって変化しないものと考えようとする点で、円環的な時間軸を前提としつつ、停滞意識をもたらしものとして機能する。

とはいえ、グレナダにおける家父長制もそれほど単純なものではない。少なくとも考慮に入れる必要があるのは、奴隷制の時代において、カリブ海地域で支配下にあった奴隷は、男らしさを維持することが困難であったことだ。⁽³⁹⁾ そのため、核家族的な一夫一婦制のもとで親密な関係を維持することは、ほぼ不可能であった。⁽⁴⁰⁾ また、この小説でも描かれているように、家族制度を経済的に維持するには出稼ぎ労働は必須であった。教会の教えという厳格な枠組みはあるにせよ、以上の理由により、一夫一婦制の継続は困難だった。⁽⁴¹⁾

もちろん、経済的な成功が何を意味するのかという目安や、女性らしさについての概念は時代によって異なる。ドゥージーにとっては、自分の母エティーとは異なり、あくまで家族制度を維持し、「世間体」を保つことが進歩であり、経済的な観点からの安定を意味する。⁽⁴²⁾ ただ、実際には必ずしもそうとは言えない。アランの婚外子の生存は、経済的な面でドゥージーの稼ぎに依存しているからである。⁽⁴³⁾ アシャ・トールが論じるように、物語のこうした側面は、次世代の教育を含む経済面において、親への依存を前提とする資本主義システムへの批判であり、また、再生産労働が共同体ではなく、個人としての女性にのしかかっている状況への批判としても読むことができる。⁽⁴⁴⁾

以上のような円環的な時間軸において機能する恥が、家父長制の固定として停滞意識を

助長するものであるとすれば、直線的な時間軸での恥の意識が重要になってくる。母ドゥージーの時代になると、男性からの自立や、白人への従属状態からの離脱が、将来的な目標として設定される。父のアランは、長男のサイモンは医者になれるかもしれないと考えるが、長女のエンジェルは看護師がせいぜいだろうと考える(111)。それに対して、ドゥージーは娘のエンジェルに伝える。「おまえは愚か者じゃない。分かるだろう。男の方が何かと楽なんだ。自分を恥ずかしめたり、私に恥ずかしい思いをさせたりするんじゃないよ。誰も自分のことを貶めることなどできないって、見せてやりな。いいかい?」(114)。他方で、このような必要を感じつつも、ドゥージーは自身の世代では変革が十分に実行できないという不満を持っている。そのため、娘のエンジェルに期待をかけつつも、息子のルパートやカールを甘やかすことで、本人の意思に反して家父長制の継続を許してしまっている。その反面、娘のエンジェルは高校までは植民地教育を受けながらも、大学に入ってから同世代との会話や大学での講義を通じて、それまでの世代にはなかった新たな言葉を手に入れる。作者の言葉を用いれば、「読書を通じた」知恵である。⁽⁴⁵⁾ 作品は、このような世代間の対立のうち、どちらがより正しいのかを判断することはない。ドゥージーからエンジェルへ、さらには、マ・グレースからマ・エティーへと、母から娘へ、女性から女性への教育として受け継がれる恥の感覚は、一見してパラレルになっているが、差異もある。恥の表れによって、いずれの場合も結果として家父長制を維持してしまう。とはいえ、当初は男性中心主義への批判が込められており、そこからの離脱が願望として存在していた。単なる現状への不満にとどまらず、構造的な変革の次世代への期待があった。恥という情動は、円環的な時間での停滞を断ち切ることを求め、直線的な時間での変化を予示する。

他方で、円環的な時間意識を招く恥でありながら、それが停滞的なのか漸進的なのか判別しがたい場合もある。エンジェルが大学に入ってまもなく、寮のメンバーと知り合い、少しずつ友人もでき始めた頃のこと、試験の季節がやってきた。外ではブーゲンビリアが咲いているが、ふと佇んでオジギソウ(Shame Bush)をながめる。「下の方では、オジギソウが恥ずかしそうに壁をつたって這う。割れ目をおおい、大きくなる。近づいて触れたら、オジギソウは縮こまって、直ちに深い眠りへと沈んでしまう。ゆっくり、用心深く、また姿をあらわすのだろう」。エンジェルはいつも大学のアーツセンターのそばの階段に腰掛けて、目の前を通る人びとを眺めている。

大学の礼拝堂には行かなかった。その年で一度だけ礼拝をした。オジギソウに触れようと立ち止まったが、見ていると自身から遠のいてしまった。自身に残されたのは、ブーゲンビリアとオジギソウについての記憶、それに教会の静けさだ。次に訪れたのは早朝のこと、教会の周囲の庭園を散策するためだった。よく手入れされた庭園から薔薇の花を盗み、オジギソウになんとか話しかけようとしたのだった。(154-155)

オジギソウはグレナダでは「恥の茂み」(Shame Bush)と呼ばれる。オジギソウという植物の所作、すなわち触れようとすると遠ざかってしまうという動きが、恥という情動そのものの理解し難さを形象化している。⁽⁴⁶⁾ ドゥージーは娘に対して教会に通いなさいとしつこいくらい言い聞かせてきた。エンジェルは地元にはいた時はこうした教えを邪険に扱ったが、グレナダから遠く離れてジャマイカの大学に通ってからは、たまに教会に足を向ける程度である。ここでは、宗教に代表される民衆の生活や拠り所となる心の領域と、

読書や大学での講義を通じて得た知恵が対比されている。⁽⁴⁷⁾ エンジェルは、前者から遠ざかったのちに出会い直しているという意味で円環的な生を生きているのだが、大学での知を身につけることが、彼女にとって前進なのか後退なのか自信が持てない。停滞的か漸進的か判別しがたい理由はここにある。

もうひとつの例を見てみたい。大学での教育課程を終えて地元に戻り、エンジェルが教員として働き始めてからのこと、父親のアランと口論になる。彼が指導者の写真を居間に掲げ続けていることに対して、母親は、賛成はしないけれども、自分の家ではないから仕方がないと自分を納得させている。そんなドゥージーに対し、エンジェルは、自分はその指導者の写真を見ていると恥ずかしくなると言う (215)。さらに、母さんは男の奴隷だとなる。そして、額縁に入った肖像のガラスを割る。この部分だけ見れば、直線的な時間のなかで機能する怒りとしての恥であるわかる。ドゥージーはショックを受け、エンジェルは家を出る。それから三ヶ月ののち、家に電話をかけると、父が肖像画を外したようだ、と母に教わる。その知らせを受けてエンジェルは自分の部屋を眺める。「彼女は壁に貼ったラストファリの少年の写真を見上げた。額縁に入った、女性が拳を握った姿を描いた絵をながめた。父のことを考えた。勝ち誇ったようには思えなかった。実際は、少し恥ずかしかった」 (223-224)。⁽⁴⁸⁾ エンジェルが書物によって得た知識を親にぶつけて勝ち誇るとき、彼女の述べている内容はこれ以上なく正しい。「指導者」の偶像化を批判することも、彼の体現する新植民地主義的な政策を批判することも、母に内面化された家父長制を批判することも正しい。しかし、書物を通じて得た知識によって乗り越えたつもりになった過去の自分は、完全には消え去っていない。だから、敵対していた父に自分の似姿を見て、恥じらいを覚えてしまったのだ。

すなわち、ここで検討した円環的時間は、

短期的変革をめざすにあたっての怒りの表明という直線的時間のなかに埋め込まれていた。短期的変革としては、肖像を恥と思うエンジェルが肖像を掲げ続けようとする父と対立するなか、肖像の枠組みを破壊するという行為に及ぶことで、家父長制の権威を一時的にであれ批判することにつながった。これが人民革命政府によるゲイリー政権の奪取に先行して描かれることで、社会の変革を予示していた。一方で、父が肖像を自ら下ろしたことを聞いたエンジェルは、自分が偶像を掲げていたことと父が肖像に固執していたことに相似形を見出して、恥を覚える。すなわち、直線的な時間感覚の恥が、円環的かつ反省的な時間意識と接続する。そのような意味で、直線的な時間と円環的時間が、恥を経由して弁証法的な過程を経ることによって、漸進的な長い時間での変革が呼び込まれている。

五、詩作品における恥

上で言及したオジギソウ (Shame Bush) を主人公が眺めているという場面で明らかのように、恥という情動は具体的な手触りを持った詩的な形象として取り出されていた。このオジギソウをめぐる表現は、『エンジェル』では上に引用した箇所にはしか出てこない。しかし、二〇〇三年に発表された詩集 *Lady in A Boat* のなかの詩、「点呼をとる (Roll Call)」と「オジギソウ (Shame Bush)」では、恥という情動が前景化する。小説は革命直後の場面で終わるが、これらの詩は内紛による革命崩壊後の米軍占領とその余波という、グレナダにとって長く暗い時期を経た上でこそ書かれた。これらの作品では、革命の失敗の責任を一部の前衛党集団に押し付けるのではなく、国民的なより広い責任として問い直すために、恥という感情が形象化されている。双方の詩で、円環的な時間軸における停滞意識を名指すものとして恥があらわれる。

コリンズとのインタビューのなかで批評家のデイヴィッド・スコットが述べるように、

二〇〇三年に出版された詩集*Lady in A Boat*は、グレナダ革命崩壊とその後の米軍侵攻について反省的に語った詩が多い。⁽⁴⁹⁾ 二〇〇一年から二〇〇三年にかけてグレナダで行われた真実和解委員会は、九〇年代に南アフリカで行われた先行事例をモデルとしていた。南アでは、キリスト教的な精神と南ア特有の「ウブントゥ」の精神に基づいて、アパルトヘイト時代とその時代からの移行期を焦点として、加害者が公の場で被害者に許しを乞うた。国民的な事業として、過去の暴力について清算を行い、和解と赦しを推進したのだった。⁽⁵⁰⁾ グレナダでは、主に人民革命政府が政権をとっていた時代の暴力、そして、一九八三年十月の内紛によるビショップらの殺害が主題となり、ビショップの遺骸のありかについての調査が行われた。公聴会や講演会、被害者遺族への聞き取りや質問状の送付などを経て、二〇〇六年に報告書が出版された。⁽⁵¹⁾ ただし、問題点としては、八三年十月十九日の内紛で生き残ったいわゆる「グレナダ・セブンティーン」には、聞き取りが行われなかったことだ。そのような意味で、国家主導で導き出された解決は、「真実」にはほど遠いと評価されてきた。⁽⁵²⁾

以下で検討する詩は、いずれも上記の真実委員会の文脈を踏まえつつ、そこでは十分に問われなかった、「暴力」の直接の加害者と被害者以外の人びとの共犯性について問いかける。たとえば、「点呼をとる (Roll Call)」という題名の詩では、恥という情動が、否認された事実と死を浮かび上がらせるための装置として配置される。詩は「あなたの姿があらゆる場所で目に入る。／この何年ものあいだ、あなたは私の旅路に取り憑いてきた」という言葉で始まる。おそらくは革命とその最中の理由の明かされない死、そして、その後の米軍侵攻で命を落とした無数の生命への喪が行われていないと示唆する。そして、失われた命と体の部分、残された者たちにとっての喪があげない日常を、ひとつずつ数え上げ

る。「何人の命が失われたのか？ 片目を、手脚を失ったのは、誰だ？ 不名誉な原因で子供が死んだために／静かに悲しみにみちた葬送の歌を／泣きくれるのはどの母親だろう？ あれは、父親の破壊された体をもとめて地面を掘りおこす／娘の両手だろうか？」まさに革命への、国への愛によって命を落としたことを確認する（「愛の名によって、あまりに多くのことがなされてきたことを／時間は目撃してきた」）。そして、八三年十月十九日に殺された側のみならず、生き残った「グレナダ・セブンティーン」も、「国を愛する」側であったと示唆する。そうすることで、米軍侵攻後の集団的記憶の中で蓋をされていた存在にも光を当てようとする。

知ろうとしない方がいいのだろうか、たとえ
彼らが間違っていたのだと宣告したとしても、どの夢想家が
国を愛するあまり命を捧げたかなんて？

軀は破壊され、散り散りになり、損傷はひどい。

この人たちの名を呼ぶことができるだろうか？ この
人たちの親は誰なのか？ あなたが名を呼ぶ

ことを恥じているのは、どの名前なのか？ 自己への信
をとりもどそうと闘うことに、これほど恥ずかしい
思いをしなければならないなんて、なんて恥ずかしいこと。⁽⁵³⁾

破壊された体は、いまだ遺骸が見つからないモーリス・ビショップのものかもしれない。あるいは、革命の際にコントラ（反革命勢力）と名指され、命を落とした者かもしれ

ない。⁽⁵⁴⁾ 米軍侵攻時に命を落とした者でもあるだろう。否認は過去を想起することを自らに封じた状態でもあるが、恥という情動を梃子にすることで過去が現在へと手繰り寄せられる。「これほど恥ずかしい思いをしななければならないなんて、なんて恥ずかしいこと」という一節で、恥というそれ自体内向を志向する情動に、さらに恥という情動を重ね合わせることで、その内向性に別の方向性を与え直している。ここでの恥は、個人の内面と内面をつなぎ、否認を集団のものとして引き受けることで生まれる、社会性のありかを示唆している。まずは恥のありかを名指すことが、円環的な時間意識のなかにある人びとを、停滞意識から漸進的なあり方へと振り向けるきっかけになりうる。

次の詩「オジギソウ (Shame Bush)」では、以下の詩の二段目にあたる部分（「でも彼らは～」以下）が繰り返される。作者のコリンズは、「どのようにして国が内側へと引きこもってしまったのかについて」語っている詩だと述べる。⁽⁵⁵⁾

ここ何年も言われてきた、まだグレナダの人びとは口を開いていないと
二十年にもなるが、目が語るのは沈黙が支配しているということ
素敵な日々のことも覚えている、それも変わらぬ嘆きのタネ
運動のあの輝きの約束を忘れることができない
マンゴーの甘い汁、グアバの甘い汁にマンゴーの果汁
空港や日々の計画のことを覚えている、土地には
作物が豊かに実り、口々に上るのは、これぞ民衆のための教育だということ
と
農業学校や民族闘争のことを覚えている。
考えているほど、人びとの記憶は短

くはない

彼らはわたしたちの破壊した希望、
わたしたちの破壊した物事を嘆き悲しむ

でも彼らは語らない

なぜなら、オジギソウに触れてごらん

縮こまってしまうから

オジギソウを眺めてごらん

閉じて守りに入ってしまうから

オジギソウをじっと眺めてみて、あなたが読解する様子を見せて

人びとがなぜ沈黙を守っているのか
わかるでしょう⁽⁵⁶⁾

革命の輝かしい日々や社会主義の実験にもとづく国家建設のことは、まだ記憶に新しい。それらがもたらした多くの「果実」を人びとは覚えている。人びとは忘れていないわけではないが、語りたくないし、語ることができない。それは、「彼ら」すなわち「わたしたち」がこの社会の建設を途中で自ら破壊してしまったことを知っているからだ。

『エンジェル』における「オジギソウ (Shame Bush)」は、大学で学ぶ知識とは別の、宗教を含む民衆的な知と結びついた歴史や感情の領域を指し示していた。その領域が、円環的な時間軸と親和的であるとするならば、この詩「オジギソウ」における恥は、内向性と不可分のものとなっている。記憶の否認された状態に恥という情動を結びつけることにより、その状態が個人特有のものではなく、国民的かつカリブ海地域全域にわたる集団的記憶とも関連していることを示唆している。やはり、『エンジェル』の場合と変わらず、ここでも書物によってアーカイヴ化される知とは別のものとして、「恥の茂み」という領域が定位されている。⁽⁵⁷⁾「もし深いところで変容が再び起こることを求めるなら／あらゆる本に目を通せばいい、けれど地元の言い回し

を学ぶんだ」という文句に続き、詩は上記のものとはほぼ同じリフレインで閉じる。

一見して出口のないように思えるこの詩では、恥を介して一九八三年十月十九日の党内での内紛や二五日の米軍侵攻の記憶、そして、それらの責任を集団的なものとして承認するよう呼びかける。⁽⁵⁸⁾ これらの衝撃的な事実の原因を場合によっては誰かのせいにしたりしながら、みな口にできずにいるという状態を、集団的なトラウマを抱えた状態として認める。そして、恥という情動に関わるため、社会科学や法の言語では記述しにくい民衆的な記憶の領域としか言いようのない部分を、「オジギソウ」のしぐさに形象化している。上記で検討した詩「点呼をとる (Roll Call)」の場合と同様、円環的な時間軸における停滞意識に形を与えることが、まずはそこからの変容のために必要となる。

六、フェミニズムの長い革命

最後に、上で確認した直線的時間と円環的時間について、小説の構造の観点から再度考察したい。その二重の歴史意識が顕著にあらわれているのが、グレナダの民衆語を用いた言い回しや比喻による警句である。これらは、各章のあいだに小見出しとして挟まれている。この作品について論じるキャロリン・クーパーによれば、コリンズは「グレナダの人びとの口伝えの歴史に埋め込まれた苦難や闘争、創造性という伝統の重み」を肯定し、「儀式の際の歌や物語、比喻のなかで自らの知恵を語らせている」。⁽⁵⁹⁾ それゆえ、話者が誰なのかが明確にわからないようになっている。場面によっては、祖母だけでなく母ドゥージーの内面の声、あるいは、エンジェル自身の声である。⁽⁶⁰⁾

たとえば、十章に“Pwangad waya piké mwen!”と題されたセクションがある。グレナダの民衆語であるフレンチ・クレオールで、「針金がこちらに刺さらないように気をつけなくちゃ」という意味だ。⁽⁶¹⁾ このセクションでは、

職場での教育環境がなかなか変わらないことについて、エンジェルがドゥージーに不満を語る。エンジェルが教員組合の選挙で代表として選ばれなかったのは、彼女の用いる左派的な言葉遣いに同僚の教員が危険を感じたからだだった。エンジェルからすれば、「彼らが遅れていて恥ずかしい」(257)。それに対し、ドゥージーは比喻を用いて、頭ごなしに自分の考えを押し付けることが正しいのかどうかを考えさせる。「もしこの足元にいる猫を殺したりするんじゃないかと、何かそうとするならどうしたらいい？」と尋ねる。「別の猫を連れてくるというのはどう？」とエンジェルが答える。「私ならねずみ捕りを二十個仕掛けるね！　ここに戻ってくる頃には、死んでいるから」とドゥージーが答える。次に、具体的な提案として、「後で文句を言えばいいじゃないか」と言う。さらに、革命が始まってから空港の建設が始まったことについて言及し、「わたしたちが長い間待ち望んでいたことなんだ」と言う。キューバやロシアのための軍事基地だとアメリカは言うけれど知ったことか、と付け加える。ここで、ドゥージーは自分が子供の頃の話語る。ハーミテージの地にあるデ・ライル氏のカカオ・プランテーションの建物の中で、みなで輪になって銅線を手にしながら歌い踊っていた時のことだ。その歌の歌詞の一節が、このセクションのタイトル、“Pwangad waya piké mwen!”である。おそらくは、プランテーションでの過剰労働や低賃金での酷使に対して、罌を仕掛けながら農園主への復讐を誓っていたのだと考えられる。そして、ドゥージーがエンジェルに言う。「これはすごいことなんだから。手放しちゃだめだよ、絶対に。そうさ、ね！　無償の中等教育だ。教育が変化しているんだから！（中略）あんたたちみながしていることがどれほど素晴らしいことなのか、ちゃんとわかっちゃいないんじゃないのかい」(260)。ドゥージーは娘のエンジェルに教会に行くことを勧めるが、エンジェルは神が

眠っていたのではないかと白^{しろ}を切る。ドゥー
ジーはあくまで革命が神のおかげだと考え、
宗教的な位相での思考を手放さない。父も農
業に精を出して革命の動きに歩みを合わせて
いることを聞くと、エンジェルは、神が目
を覚さないであくびをしていたら、多くのこ
とを見逃してしまうものね、と軽口を叩く。そ
して、先ほど母が教えた「針金がこちらに刺
さらないように気をつけなくちゃ」という歌
詞の一節を繰り返す (261)。

これはどういうことだろうか。教育現場で
の変革を望むエンジェルは、物事が一度に変
容しないことに耐えられない。この場合、恥
を介して、直線的な時間軸上での短期的な変
革が期待されている。それに対して、ドゥー
ジーはプランテーション時代の歌から二重の
教訓を引き出す。まず、雇用主が不在の場
で歌や踊りを行うことによって、現状に対する
不満のはけ口を作り出し、将来の復讐を誓う。
エンジェルの場合と同様に直線的な時間軸上
での物事の推移を示唆しつつ、変容を予示的
な次元で考えている点で、別様の時間の変化
を導入している。もうひとつには、農園主に
対して仕掛けた罠に自分たちがかかってしま
わないよう、自らに警鐘を鳴らしている。こ
の後者の意味には、円環的な時間が含意され
ている。ドゥージーからすれば、エンジェル
たちの従事している教育改革は、かつての状
況と比べれば望むべくもなかったほど大きな
進歩である。彼女には円環的時間軸における
漸進的な進歩として状況が見えている。しか
し、物事を一気に変えようとして、人びとに
考えを押し付けようとするれば、「復讐」が待
っているかもしれない。グレナダ革命の結末を
知っている読者からすれば、ここで示唆され
る円環的な時間軸には、革命の失敗といった
悲劇的な意味合いや停滞意識（教育改革の失
敗）を読むこともできる。エンジェルには十
分に意識できていない二つの時間感覚（直線
的な時間軸における予示的感觉と円環的な時
間軸における漸進的感觉）を共有することで、

ドゥージーは自らの記憶を通じて共同体の
声を娘に伝える。そのような意味で、このセ
クションのタイトルは共同体の声でもあり、母
ドゥージー、そして娘エンジェルの声でもあ
る。そして、直線的かつ短期的な時間意識に
定位されていた恥を、予示的かつ漸進的な時
間概念へと向け直している。

ここには、前節で検討したような、恥とい
う情動それ自体の内向的な志向性が社会性を
獲得するにあたっての鍵を見出すことができ
る。小説では、革命のプロセスの進行にいく
ぶんか先行するように、マクアリスター一家
のなかでの母と娘、父と娘のあいだの対立が
焦点となる。そして、その対立は、革命のプロ
セスが円滑に進むなかで、一時的に解消され
る。アランはエンジェルと話しながら、自
分が家事労働を無償で行わせることにより妻
を搾取していると指摘され、そのことを認め
ざるを得ない。⁽⁶²⁾ ここで、娘による父の教
育が行われる (272)。このように、エンジェ
ルの世代だからこそ獲得できた男女平等とい
う観点から、所有や労働をめぐる既存の概念
を再考するプロセスに、父のアランを導き入
れている。他方で、このような「進歩的な考
え」の種とでもいうべきものは、親の世代で
すでに撒かれていたことも作品は示唆する。
このような娘から父への教育は、エンジェル
だけの力で成し得た作業ではないからだ。ア
ランと結婚してまもなく、ドゥージーは自身
と母が貯めた金でなけなしの家と土地を買っ
たが、夫のアランはそれを自分名義に変更し
てしまう。そのことに対して彼女は反論する
が、押し切られてしまう (17)。母ドゥージー
にはできなかったことを、エンジェルは直接
に自身の父親に対して教育し直しているの
である。すなわち、直線的な時間軸上の変容は
予示的なものとしての未来への投機が過去に
おいて行われていたからこそ可能だった。そ
れは、世代が変わっても男女の関係性が変化
しないという停滞意識ではなく、円環的な時
間における漸進的な変容と捉えることができ

る。これこそが、フェミニズムの長い革命であると言える。

以上が、子が親を乗り越えていくプロセスであるとするれば、次の例は、親が過去の自分を引き受けつつ自ら変容するプロセスである。アランはドゥージーの勧めで、自分の婚外子のことを、まずは息子たちに、次にエンジェルに告げる。その後、アランは二人の娘をエンジェルに紹介する（272-273）。ドゥージー自身も、不本意にはあるが、アランの婚外子の存在を認めて、自分の子供らに会わせるようアランに勧めることで、自らが固執していた家族概念を変容させている。⁽⁶³⁾ ここには恥という情動は刻まれてはいないが、自ら認めてこなかったものを認めるというプロセスがある。つまり、真実和解委員会にはなし得なかったような形で、加害と被害の記憶を「かれら」に押しつけるのではなく、「わたしたち」のものにするための必要なプロセスを暗示しているとも読むことができる。

物語の終結部近く、ニューヨークで治療中のエンジェルを見舞いに来た大学時代の友人カイについて、ドゥージーが尋ねる。エンジェルは、「私たちは仲が良いというだけ。彼のことはとても好き。だけど、どちらも結婚とかそうしたことは考えていない」と答える。そして、革命のあいだ付き合っていたジェリーのことを尋ねられ、考えが異なるから別れたと付け加えた後で、以下のように述べる。「もし誰かと結婚するか一緒に住むなら、彼〔カイ〕のような人にするつもり」と答える。母は、「なんだいそれは、一緒に住むだって！」と反応する（346）。パートナーシップを考えるにあたって、結婚を前提にすることのないエンジェルは、ドゥージーにとっては理解不能な存在である。こうした変化は世代を下るごとに家族関係や男女関係をめぐる考え方が進歩しているという点で、直線的な時間に当てはまる。けれども、マ・エティーが前夫との子供とともに別の男と住んでいたことを、マ・グレースが頭ごなしに否定したようには、

ドゥージーはエンジェルのことを非難することはない。ここにも、円環的な時間のなかにある、漸進的な時間軸での変容を見てとることができる。

このように、革命の論理に親和的な単線的な時間と、グレナダの民衆語であるフレンチ・クレオールを用いた言い回しの使用に顕著なように、円環的かつ予示的な時間軸が、この作品を支配する二つの時間概念である。上記のように、世代の差を越えてゆっくりと進行する漸進的な時間もまた、この小説に流れている。重要なのは、直線的時間と円環的時間のどちらが正しいか間違っているかを作品は判断していないということだ。対話のなかに響く亀裂や沈黙に埋め込まれた未来形でのグレナダ革命を読解することができるかどうか、それが読者に問われている。

七、おわりに

本論では、マール・コリンズ『エンジェル』を読解する中で、グレナダ革命をめぐる作品に通底する二重の時間が恥という情動を梃子として、実際の革命とは別の「長い革命」の時間を生み出すあり方について検討した。作品では、直線的な時間の流れは短期的な政治目標の達成に主眼が置かれているという点で、現実の革命における時間の流れ方と親和性があった。マ・エティー、ドゥージー、エンジェルという三世代にわたる女性の視点を配置することにより、女性の社会における立ち位置や家父長制における役割の変化といった点から、成長や進歩が見えるようになっている。本論では、恥という情動に注目することで、それが自らの置かれた状況への不満や怒りとしてあらわれるのみならず、次なる世代への変革が含意されるという意味で、直線的かつ予示的であることを確認した。

他方で、円環的な時間の流れについては、必ずしも直線的な時間軸と対立するわけではない。『エンジェル』においては、恥の情動を介して、直線的な時間と円環的な時間の外

見上の矛盾や対立が相対化されるからだ。具体的には、宗教や口承伝統を含む民衆的な知（円環的な時間における停滞）と対比されることで、高等教育における知（直線的時間における進歩）が相対化されていた。また、恥は政治的な指導者像をめぐる娘と父の世代間の対立を先鋭化させ、革命を予示するような時間を作り出していた。同時に、この情動は革命における知の硬直に警鐘を鳴らすことで、円環的な停滞を見出すことにもつながっていた。

しかし、コリンズの詩に代表されるグレナダ革命をめぐる文学作品のなかに恥という情動を読むことは、新植民地主義的状况を乗り越え、新たな社会を打ち出したはずの革命を自らの手で崩壊させてしまったという記憶と結びつかざるを得ない。グレナダ及びカリブ海地域において左派政治に刻まれた傷に直面すると、革命に親和的な直線的時間は後景化し、悲劇的なヴィジョンに覆われた円環的時間が前景化する。詩集*Lady in A Boat*に収められたいくつかの詩においては、恥は沈黙や内向性を定位することにより、共犯性を分節化するきっかけとなる。つまり、沈黙に代表される内向的な方向性を、個から集団へ方向づけ直すことにより、グレナダ革命崩壊の責任を社会全体のものとして共有するというヴィジョンが重要となる。そのために、「点呼をとる」「オジギソウ」などの詩においては、恥という形象を通じて円環的時間軸における停滞状況に形が与えられた。

最後に、家父長制や教育の変容という側面に関しても、直線的な時間軸における予示的な感覚や、円環的な時間軸ながらも少しずつ物事が前に動いているという感覚が重要である。遅々として変容しないように見える社会構造も、ドゥージーの世代の経験からすれば飛躍的な進歩である。特に、アランに対する「家事労働に賃金を」という問いかけは、家父長制下でのイデオロギーの継承とは別様の変化を促した。それは、「進歩的」であり直

線的な変容である。同時に、ドゥージーが感じた貧しさの記憶や男性中心主義への不満は恥としてしるしづけられ、次世代のエンジェルによって継承され問い直された。そのような意味で、恥という情動はフェミニズムの「長い革命」を用意したと言える。こうしたプロセスには、世代を超えた女性同士の絆を垣間見ることができる。さらに、親もみずから変容し、家族概念を再考する中で、それまで否認してきたものに向き合う。マクアリスト一家というマイクロコスモスをメトニミーとして読解することで、真実和解委員会によって十分注目されてこなかった記憶への向き合い方が予示される。『エンジェル』から見えてくるのは、「進歩的」な知と民衆的な知のありかのどちらも手放すことなく、後者に向き合い、読解するプロセスを続けることこそが、未来に投機されたグレナダ革命を継続することである。

注

(1) Audre Lorde, "Grenada Revisited: An Interim Report," *Sister Outsider: Essays and Speeches*, New York: Ten Speed Press, 2007[1984], pp.176–190.

(2) 本稿で扱う *Angell* は一作目の小説である。小説の二作目に *The Colour of Forgetting* (1995)、詩集に *Because the Dawn Breaks!* (1985)、*Rotten Pomerack* (1992)、*Lady in A Boat* (2002) がある。グレナダ革命を扱ったほかの代表的な小説に Dionne Brand, *In Another Place, Another Time* (1992) があるが、稿を改めて論じたい。

(3) Jacqueline Bishop and Nicole McLean Dolace, "Working Out Grenada: An Interview with Merle Collins," *Calabash: A Journal of Caribbean Arts and Letters*, 3.2 (2005), p. 65.

(4) Merle Collins, "Tout Mon ka Pléwé (Everybody Bawling)," *Small Axe*, 22 (2007), p.12. 以下においても、コリンズにおける円環的な時間概念を、悲劇とは異なった概念で解釈する視点が提示されている。Sharare Deckard, "Dreams of Revolt, the 'Revolt of Nature': World Literature

and the Ecology of Revolution.” *World Literature and Dissent*, edited by Lorna Burns, Katie Muth, London: Routledge, 2019, p.167.

(5) David Scott, “The Fragility of Memory: An Interview with Merle Collins.” *Small Axe*, 31 (2010), p.81; Shalini Puri, *The Grenada Revolution in the Caribbean Present: Operation Urgent Memory*. New York: Palgrave, 2014. 二〇〇一年から〇三年にかけてグレナダで行われた真実和解委員会との関連を論じたものは、以下を参照のこと。April Shemak, “Re/writing Reconciliation in Merle Collins’s *Angel*.” *Caribbean Quarterly*, 60.1 (2014), pp.42–60. 恋愛を含む親密な領域の関係性の変革をグレナダ革命との関連で論じた論考は、以下を参照。Asha Tall, “The Erotic Schemes of *Angels*: Love on the Line in Merle Collins’s Novel Revisioning.” *Journal of West Indian Literature*, 27. 1, (2019), pp. 50–69. グレナダ革命についてフェミニズムの観点から分析するローリー・ランバート (Laurie Lambert) は、グレナダ革命を描く文学が恥と沈黙の関係を扱っていると指摘する。そして、いまだ関係者が生存しているために決定的な歴史が描かれていない中で、何が記憶され、何が忘却されているかについて問うていると論じる (*Comrade Sister: Caribbean Feminist Revisions of the Grenada Revolution*, Virginia: University of Virginia Press, 2020, pp.12–13)。グレナダ革命と女性の役割については以下を参照のこと。Nicole Laurine Phillip, *Women in Grenadian History: 1783-1983*, Kingston: University of the West Indies Press, 2010, pp.118–128.

(6) Shemak, “Re/writing Reconciliation in Merle Collins’s *Angel*,” pp.45–46; Lambert, *Comrade Sister*, p.40. David Scottは、物語と時間概念について、異なった解釈を提示している (*Omens of Adversity: Tragedy, Time, Memory, Justice*, Durham, NC: Duke University Press, 2014, p.78–87)。

(7) Antonio Benítez-Rojo, *The Repeating Island: The Caribbean and the Postmodern Perspective*.

Trans. James E. Maraniss. Durham, NC: Duke University Press, 1996; Édouard Glissant, *Poetics of Relation*. Trans. Betsy Wing. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press, 1997 [エドゥアール・グリッサン『関係の詩学』管啓次郎訳、インスクリプト、2000年] ; Kamau Brathwaite, *M/R*. New York: Savacou North, 2002. とりわけ、グリッサンによる「開かれた円環」という概念は本論に関係する (『関係の詩学』二五三～二五四頁)。しかし、『エンジェル』における円環的時間概念や、これから定義する本論で用いる円環的時間軸における停滞や漸進といった概念は、グリッサンによる概念とは異なる。

(8) ウィリアムズは『長い革命』のなかで、三つ次元での変容を定義する。まずは、革命や支配層の変化、階級の変動などの政治的な次元での変容である。次に、個人の学びやコミュニケーション (伝達行為) 手段の変容であり、技術革新に影響を受ける変容である。三つ目に彼が挙げているのが、「長い革命」である。「長い革命とは、いまでは私たちの歴史の中心にあるものだが、政治組織としての民主主義のためだけではなく、学びや伝達行為の手段へのより包括的なアクセスのためでもない。このような変容はそれ自体で容易ではないが、結局のところ、人間や社会についての新たな概念から意味や方向性が引き出されるのだ。それに多くの人びとはこうした概念を、おのずと描き出し、解釈してきたのだ」 (Raymond Williams, *The Long Revolution*, Ontario, Canada: Broadview Press, 1961[2001], pp.140–141).

(9) ウィリアムズへの批判については以下がある。C・L・R・ジェームズは、ウィリアムズがマルクスの考えた革命の必然性について理解しておらず、ロシア革命やフランス革命から学ばずにイギリス労働者階級の経験に偏りすぎであると批判する (“Marxism and the Intellectuals,” *Spheres of Existence: Selected Writings*, London: Alison and Busby, 1980, pp. 115–119)。スチュアート・ホールは、ウィリ

アムズが文化について語る際にレイシズム批判が欠如していると指摘する (“Culture, Community, Nation,” *Cultural Studies*, 7. 3 [1993], p. 360)。また、ゴウリ・ヴィスワナタン (Gauri Viswanathan) は、ウィリアムズが宗主国における文化概念の形成に必須であった帝国主義についての問いを回避していると論じる (“Raymond Williams and British Colonialism,” *The Yale Journal of Criticism*, 4. 2 [1991], pp.47–66)。

(10) 恥とアイデンティティの問い、社会性をめぐるより一般的な論考については、以下を参照のこと。Eve Sedgwick, *Touching Feeling: Affect, Pedagogy, Performativity*, Durham, NC: Duke University Press, 2003, pp.35–38, 61–65。[イヴ・コソフスキー・セジウィック『タッチング・フィーリング 情動・教育学・パフォーマンス・ヴィティ』岸まどか訳、小島遊書房、二〇二二年、六六～七〇、一〇九～一一四ページ。]

(11) Sara Ahmed, *The Cultural Politics of Emotion*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2004, pp.101–121; Jacqueline Rose, *On Not Being Able to Sleep: Psychoanalysis and the Modern World*, London: Vintage, 2004, pp.1–14.

(12) Zoë Wicomb, “Shame and Identity: the Case of the Coloured in South Africa,” *Writing South Africa: Literature, Apartheid, and Democracy*, edited by Derek Attridge and Rosemary Jolly, Cambridge: Cambridge University Press, pp.91–107; Erica L. Johnson, “Colonial Shame in Michelle Cliff’s *Abeng*,” *The Female Face of Shame*, edited by Erica L. Johnson and Patricia Moran, Bloomington, IN: Indiana University Press, 2013, pp.89–99.

(13) グレナダ革命を悲劇的なヴィジョンにおいて論じる作業は、以下を参照のこと。Scott, *Omens of Adversity*.

(14) デイリーが政権の座につくまでの政治過程についての詳細な分析は、以下を参照のこと。A.W. Singham, *The Hero and the Crowd in*

a Colonial Polity. New Haven, NJ: Yale University Press, 1968.

(15) George Brizan, *Grenada, Island of Conflict: From Amerindians to People’s Revolution 1498–1979*, London: Zed Books, 1984, p.35; Merle Collins, “Are You a Bolshevik or a Menshevik? Mimicry, Alienation and Confusion in Grenada Revolution.” *Interventions*, 12.1 (2010), p.37.

(16) Merle Collins, “*Tout Mon ka Pléwé*,” p.7.

(17) Scott, “The Fragility of Memory,” p.99; Collins, “Are You a Bolshevik or a Menshevik?” p.37.

(18) Lambert, *Comrade Sister*, p.9; Brizan, *Grenada, Island of Conflict*, pp.378–379.

(19) Scott, “The Fragility of Memory,” pp.103–104.

(20) Scott, “The Fragility of Memory,” p.101, n.25.

(21) Merle Hodge, Chris Searle, eds. “*Is Freedom We Making*”: *The New Democracy in Grenada*. Barbados: People’s Revolutionary Government of Grenada, 1982; Chris Searle, *Words Unchained: Language and Revolution in Grenada*. London: Zed, 1984.

(22) 歴史家のマニング・マラブルによれば、人民革命政府の直接民主制は、「C・L・R・ジェームズ流の下からのラディカル・デモクラシーや、〔ジュリウス・ニエレレによる〕タンザニアの「ウジャマー」モデルなどから影響を受けていた」(Manning Marable, *African and Caribbean Politics: From Kwame Nkrumah to the Grenada Revolution*, London: Verso, 1987, p.208, 210)。ニュー・ジュエル運動の前身の一つである人民会議運動 (MAP) へのC・L・R・ジェームズからの影響については、以下も参照のこと。Brian Meeks, *Caribbean Revolutions and Revolutionary Theory: An Assessment of Cuba, Nicaragua, and Grenada*, Kingston: University of the West Indies Press, 1993, p.146. 革命が実現する以前、人民革命政府の理論的支柱であるバーナード・コアードらは、ジェー

ムズ流の民主主義やアフリカ社会主義よりも、マルクス・レーニン主義に近い立場をとっていた。ブライアン・ミークスは、政権奪取に必要であったレーニン主義を革命成就以後も取り続け、一部の指導陣のあいだでのみ重要な事項が共有されていたことが後の革命崩壊の予兆であったと分析している (*Caribbean Revolutions and Revolutionary Theory*, p.153)。

(23) Fitzroy Ambursely, “Whither Grenada? An Investigation into the March 13th Revolution One Year After.” *Contemporary Caribbean: A Sociological Reader, Vol.2*, edited by Susan Craig, Maracas: College, 1982, p.452.

(24) のちにコアードは、このような判断は誤りであったと振り返っている (Puri, *The Grenada Revolution in the Caribbean Present*, p.73)。

(25) Lambert, *Comrade Sister*, p.31.

(26) Scott, “The Fragility of Memory,” p.134.

(27) Merle Collins, “Grenada---Ten Years and More: Memory and Collective Responsibility,” *Caribbean Quarterly*, 41. 2 (June 1995), p.71.

(28) Lambert, *Comrade Sister*, p.33.

(29) 米軍侵攻により命を落としたグレナダの人びとは約160名、米兵は19名、キューバ人は25名から71名に及ぶ (Lambert, *Comrade Sister*, p.10)。

(30) 米国内でのグレナダ侵攻の文化政治表象については、以下を参照のこと。Puri, *The Grenada Revolution in the Caribbean Present*, pp.99-126.

(31) Collins, “Grenada---Ten Years and More,” p.76.

(32) Scott, “The Fragility of Memory,” p.142.

(33) コリンズは、グレナダ革命で命を落とした者たちのみならず、十七世紀半ば、フランス軍の侵略から逃れて崖から身を投げて命を落とした先住民に関してもまた、十分に記憶されてないと述べる (Scott, “The Fragility of Memory,” p.155)。

(34) Scott, “The Fragility of Memory,” p.109-110.

(35) Bishop and Dolace, “Working Out Grenada,”

p. 59.

(36) 作者が民衆史的な視座に関して述べている以下を参照のこと。Betty Wilson, “An Interview with Merle Collins,” *Callaloo*, 16.1 (1993), p.102.

(37) カール・マルクス「アルノルト・ルーゲへの手紙 一八四三年三月」村岡晋一訳、『マルクス・コレクション7 時局論 (下) / 芸術・文学論 / 手紙』村岡晋一 / 小須田健 / 吉田達 / 瀬嶋貞徳 / 今村仁司訳、筑摩書房、二〇〇七年、三六四～三六五頁。Timothy Bewesは、この一節について、「マルクスにとって、恥は共役不可能な出来事である。すなわち、自分自身の国に対して同一化することも、非同一化することもできないということなのだ」と指摘する (*The Event of Postcolonial Shame*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 2011, p.6)。

(38) Merle Collins, *Angel*. Leeds: Peepal Tree Press, 2011, p.57. コリンズは二〇一一年に作品を改稿して出版している。以下、同書を底本とし、本文からの引用や言及はページ数のみをカッコにくくり、本文に挿入する。

(39) Hilary Beckles, *Black Masculinity in Caribbean Slavery*, St. Michael, Barbados: Women and Development Unit WAND, School of Continuing Studies, UWI, 1996, p.4.

(40) Orlando Patterson, *The Sociology of Slavery*, London: Pluto Press, 2022[1967], p.167.

(41) Tall, “The Erotic Schemes of *Angels*,” p.53.

(42) Tall, “The Erotic Schemes of *Angels*,” pp.53-54.

(43) Tall, “The Erotic Schemes of *Angels*,” p.60.

(44) Tall, “The Erotic Schemes of *Angels*,” p.60.

(45) Scott, “The Fragility of Memory,” p.161.

(46) ジャクリーン・ローズ (Jacqueline Rose) は、「恥はそれ自体を恥じているようでもある」と指摘する (*On Not Being Able To Sleep: Psychoanalysis and the Modern World*, London: Vintage, 2004, p.1)。またティモシー・ビューズ (Timothy Bewes) は、「恥を理解可能なも

のとすることは、その感情を、それゆえ、私たちがその感情を把握する可能性をも同時に解消させてしまうことになる」と述べる (*The Event of Postcolonial Shame*, p.3)。

(47) デイヴィッド・スコットは『エンジェル』で、とりわけエンジェルとドゥージーの関係のあいだに、「読書を通じた学びと民間の知恵ないし民衆的な学びとの緊張感」があると指摘する (“The Fragility of Memory,” p.148)。

(48) コリンズはインタビューで男性指導者の欠点について指摘している。「指導的立場に立つ機会を与えられるのがとりわけ男性の政治指導者なのですが、人びとが自らの最も重要な部分であるとみなすものとの共感をきわめて頻繁に失ってしまうのです」 (Bishop and Dolace, “Working Out Grenada,” p. 62)。『エンジェル』での指導者像批判は、指導的イメージの固定化がもたらす陥穽にまで踏み込んでいる。

(49) Scott, “The Fragility of Memory,” p.160. とりわけ、内紛による革命の瓦解については「起こればならないことが起こってしまった。そのことを感情の面でどのように扱ったらいいいのかわからなかった」と述べている (強調は原文、Scott, “The Fragility of Memory,” p.43)。

(50) 「ウブントゥ」 (Ubuntu) にはさまざまな定義や解釈が存在するが、コサ語で「あらゆる人類をつなぐ普遍的な絆」という意味である。真実和解委員会の詳細かつ批判的なドキュメントについては、アンキー・クロッホ『カントリー・オブ・マイ・スカル 南アフリカ真実和解委員会〈虹の国〉の苦悩』 (山下渉澄訳、現代企画室、二〇一〇年) を参照のこと。

(51) Shemak, “Re/writing Reconciliation in Merle Collins’s *Angel*,” p. 43.

(52) David Scott, “Preface: The Silence People Keeping,” *Small Axe*, 22 (2007), p.vii.

(53) Merle Collins, “Roll Call,” *Lady in A Boat*, Leeds: Peepal Tree Press, 2002, p.42, ll.19–27.

(54) コントラについての詩は、“Counter”と“Haunted (For Stephen)”を参照のこと (Collins,

Lady in a Boat, p.53, p.54)。

(55) Bishop and Dolace, “Working Out Grenada,” p. 57.

(56) Collins, “Shame Bush,” *Lady in a Boat*, p.50.

(57) 以下でのコリンズの言葉を参照。Scott, “The Fragility of Memory,” p.148.

(58) 作者とのインタビューでスコットは、「ここでの恥という概念自体は重要ではないのではないか」と指摘する。コリンズは、「自分たちが自らの夢をしっかりと守ることができなかった」という「限界」を認識するために必要であり、「彼ら」に責任を押し付けるのではなく「集団的責任を希求する」ためであると応答している (“The Fragility of Memory,” p.161–162)。

(59) Carolyn Cooper, “Grenadian Popular Culture and the Rhetoric of Revolution: Merle Collins’s *Angel*,” *Caribbean Quarterly*, 41. 2 (1995), pp.57–58.

(60) インタビューでは、第二稿以後、祖母に語りかけるような構成にした、と語っている (Wilson, “An Interview with Merle Collins,” p.103)。実際に、諺のようなものがセクションタイトルとして導入されたのは第三稿だとしている (Scott, “The Fragility of Memory,” p.147)。

(61) グレナダは十八世紀半ばまでフランスに支配されてきた。そのため、フランス語の変形したフレンチ・クレオールが民衆の言葉として話されてきた。一七六三年以後は、イギリスの支配へと移行した。その後、教育現場や公用語としては英語が主流である。

(62) 家事労働と賃金については以下を参照のこと。Marianrosa Dalla Costa and Selma James. *The Power of Women and The Subversion of Community*. Falling Wall Press, 1975; マリアローザ・ダラ・コスタ『家事労働に賃金を』伊田久美子／伊藤公雄訳、インパクト出版会、一九八六年。

(63) Tall, “The Erotic Schemes of *Angels*,” p.61.